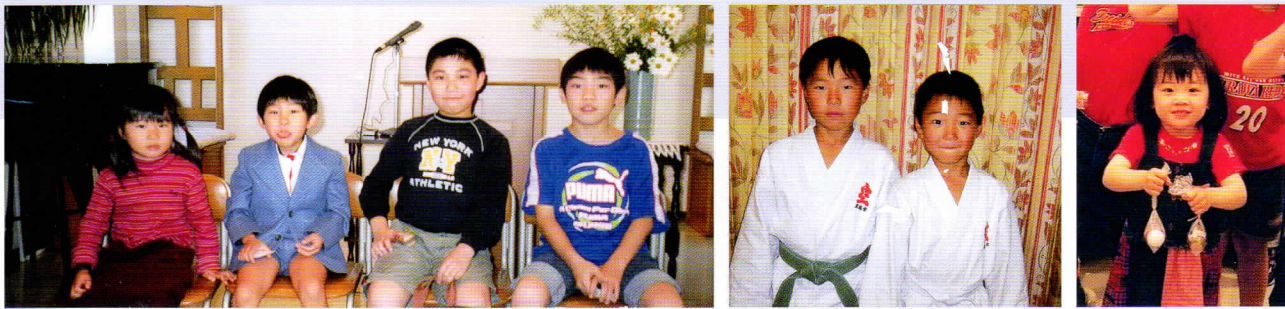


2004年度 各部会 (2)

〈小枝会〉



〈基督教講座 (ぶどうの会) 出席者〉



〈病床聖餐式〉 (2004・4・11)



—関谷孝輝兄を囲んで—



〈礼拝出席者の皆さん〉



子ども会活動



はじめての子どもクリスマス
(牧師館にて)
(1998・12・23)

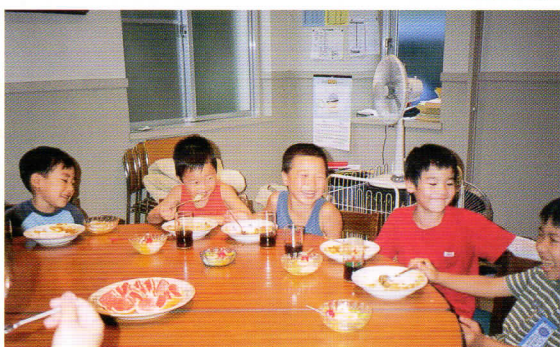


イースターエッグ作り

子どもイースター
(2000・4・22)



イースターの紙芝居



夏の子ども会 (2001・9・1)



埼玉地区修養会子ども会から参加 (2001・8・3)
ー石橋秀雄牧師 (後列右) と格闘のあとでー



礼拝とクッキー作り (2001・12・22)



礼拝、クリスマスビデオ、クッキー作り (2002・12・21)

ー子どもクリスマスー

みぎわ (1964年3月号)



植木の本場で福音の種まき

[illegible]

信徒の友 (1978年3月号)

75 信徒の友



▲矢部さんを囲んで、安行伝道所の会員とその二世たち。

紙を出して、「導いてほしい。死んだらもう死に御しを求めたい」と書いて御しをが、「来てよ。遠い唐の国ですが、だてずうに待っている。祈ってれば逢うて開れる。」と返事をいただいたので、祈っておりました。そのうちに、越谷に教があるということ、その集合が隣村で金といふことを聞いて、姉が自転車で出掛けにいき、妹の家に帰るのうにきてくたさい」とお願ひしたのです。

五（昭二二年）年のクリスマスに洗をうけました。

×

×

はじはきてくれたのやうに、長つちになつて、その子にならずにしも、信仰の歩みをうしと決心したのです。私教養所から、決心に母と祖母も、私の信仰によつて重つたのをみて、「ああ、やうばり神さまを信じたな」と思つて洗をうけました。先年八十八歳の祖母は、イエスキリスを信じて居て召されて、きました。二十歳年たつて、あの年のやうにもうたが、高校生、社会人なり、次々うと洗をうけたが、教会を支えてくれるやうになりました。結婚の世にも、何人かはの近くに住んで、いま次の子もまたが教会学校にうくるやうになりました。

×

×

振替番号 東京五―四六七〇八

一九三〇年（昭和五年）私が十歳の時でした。高い所はなかなかにありますが、窓から落ちて、急性骨髄炎になりました。かかと先の靴が小さすぎたなあかざらぬ。それで化膿してしまいました。その化膿菌の中に入りこんでしまったのです。

この結果、関節が全部曲がらなくなつて、いわゆる棒足というんですから、全部まっすぐな足、運でもらへる生活になつてしまいました。立つこともできない、痛みは今もあります。まともな歩けなくなりました。

キリスト教に関心をもちたのは、十九、二十歳で、最後の奇蹟をうける時

手、歩けるうけのうけですが、だめであった。
「これ以上よくないですね」といわれ、絶望のどん底に落ちた時、宣教師の方が、まちがひ、病室に入ってきました。そして一度は「ああ、まがいなました」といって、部屋を出られたのですが、もう一度戻ってきて、「私はこういう者なんです、さきびかに歌ってほしいですか」といわれて、歌ってくれました。
このこときっかけで、それから必死になつて聖書を讀み始めました。これがキリスト教にふれ、最初なんです。

それでは、いつもソメツネさんの生活
でした。はりがちうとあつても、
髪の毛一本おちてくとも気にいらない
といひ、泣けてしまふ。いつもらだ
といひ、友だちがよしてきてもうれし
ですが、もう歩けないということでも、
その人たちが慰めの言葉をうつけな
い生活です。それ以前に入つてす
かり変わってしまったのです。
そして、なんとしてか喜びを伝
えた。自然には歩けなくても、喜ぶの
人が集まつてきてくれると思うよう
になり、子どもたちに呼かけたのが、
おなじ伝道所のはじめなのです。

おなじところの私たちの集まりでした。

わたきのベッタリと上で、このように話しては泣く矢部の顔は明るく笑顔が美しい。いまは、自動車のリククラインニングシートでも、関西北陸一週間で、二週間で、国行でいるという。新潟県敦和学園高校の修業会が妙う。高高原へ上陣、元氣よく高校生と高高原原へ生活したという。

わたきの人生をおくった人が、伝道の証しを旅行をしているとは、驚きであった。

いま、安行伝道所は、長く矢部とともに家庭で集がったつづけてきたが、会堂をあたらしく作り替えてきた。さおい近くに、適當な土地を



ねたきりのベッドの中から
埼玉・安行伝道所会員 矢部登代子さん



月刊誌掲載 Ⅱ (1)

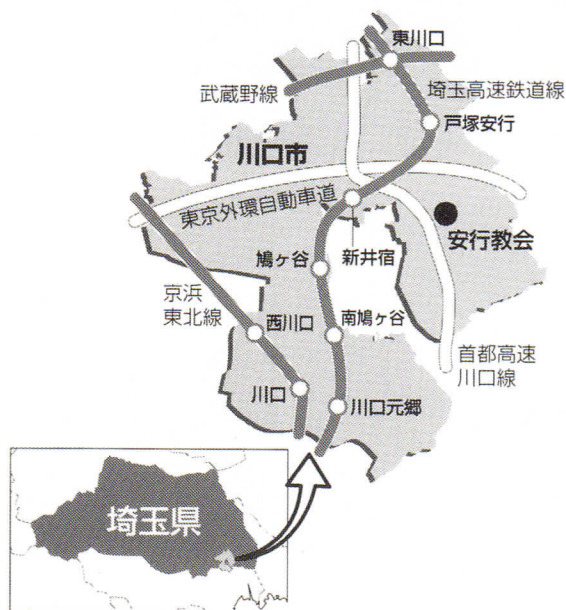
信徒の友 (2001年12月号)

ここに教会がある

あ ん き ょ う

安行教会

ひとりひとりの役割の重さを自覚して担う



午前の祈禱会。黙祷、讃美歌に続いて、出エジプト記28章を輪読してから、しばらくの間、黙読した。牧師から幕屋や祭服の図が示され、イエスが批判されたのは律法ではなくて律法主義であったことが説かれた。その後、「日毎の糧」の教会のために、誕生者のために、主日礼拝のために全員が祈った。



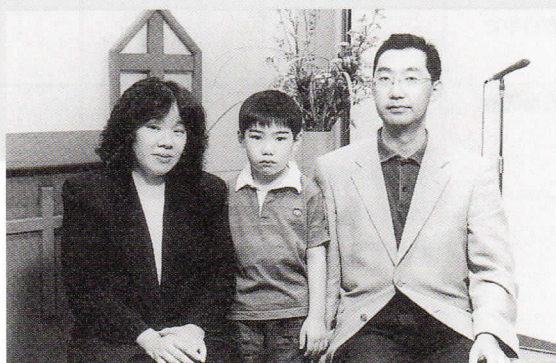
長友國子さん。受洗や海難事故で夫を亡くしたことや転居など、「10年ごとに大きな転機が訪れてきます」と語る。15年前に教会の近所に移り、転会したが、今は大宮から2時間近くかけて通う。伝道委員を長く務め、新来会者への配慮を欠かさない。「夫が亡くなったカリブ海に行く」のが夢。



矢部登代子さん宅で開かれていた教会学校から教会に連なり支えてきた人々。左から、田口幸子さん、阿久澤美智子さん、峯岸光子さん、尾木房子さん、西川弘子さん、石井わかさん。

月刊誌掲載 Ⅱ (2)

信徒の友 (2001年12月号)



田中かおる牧師・田中篤司さん夫妻と長男の守くん。

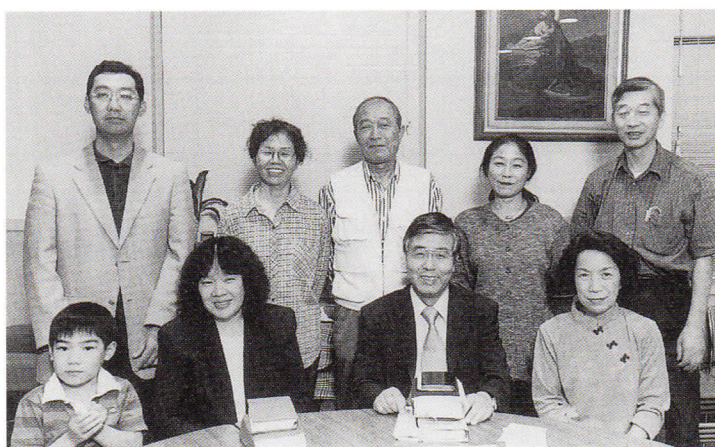


午前の祈禱会に集まった人々。

子どもと大人と共に守る礼拝の幼小科（小枝会）の子どもたち。（提供写真）



千葉泰子さん。小学校6年の時、初めて教会へ。疎開していた松山市で宣教師の影響を受けて、松山教会で受洗。現在は、キリスト教カウンセリングセンターの池袋相談室で、こころの相談にたずさわっている。「来談者の問題や悩みを聴くことが一番の仕事です」と語る。



夜の祈禱会に集まった人々。
午前の祈禱会と同じ聖書の箇所を学んだ。



阿久澤紀雄さん・阿久澤美智子さん夫妻と長男の誠さん（中央）。紀雄さんは、学生時代、長野県飯田市の入舟教会に泊めてもらい、勧められて聖書を読むようになった。大学時代、この教会で受洗。東洋英和女学院中等部教頭として、キリスト教教育にたずさわる。現在、会計役員。美智子さんは、友人に誘われて教会へ。この教会の始まりとなった矢部登代子さんの影響を受け、高校時代、受洗。婦人会副会長を務める。誠さんは、グループホームから「すいーつばたけ工場」に通い、クッキーやパンを作っている。夫妻は、「息子を通して一生懸命に生きる意味を知り、障害を個性と考えるようになった」と語る。